

小児肺炎球菌予防接種について



1. 肺炎球菌感染症とは？

- ・肺炎球菌が鼻やのどから体に入って発症します。
- ・子どもでは細菌性髄膜炎や菌血症、敗血症や重い肺炎や細菌性中耳炎などの病気を起こします。
- ・子どもやとりわけ赤ちゃんは肺炎球菌に対する免疫(抗体)がほとんどなく、肺炎球菌感染症にかかると重症化することが多くあります。また、高齢者も多くかかる病気です。
- ・細菌性髄膜炎にかかった人の約半数は0歳児、約8割は2歳前の子どもです。
- ・集団保育の子どもは2~3倍かかりやすいです。

2. 症状・経過は？

- ・細菌性髄膜炎になっても早期の症状は熱と不機嫌くらいで、血液検査をしても多くは風邪と区別できません。その後ぐったりする、けいれん、意識がないなどの症状が出てきます。
- ・抗菌薬(抗生物質)が効かない耐性菌も多く、治療がたいへんで予防が一番です。
- ・肺炎を起こした場合は、ウイルス性肺炎と異なってたいへん重症になります。
- ・中耳炎の場合は、耐性菌が多いので重症で治りにくくなります。

3. 合併症は？

- ・髄膜炎にともなう合併症は多くあり、死亡や発達・知能・運動障害などの他、難聴(聴力障害)などが起こることがあります。
- ・肺炎球菌による細菌性髄膜炎にかかる子どもは、ヒブによる髄膜炎より数は少ないですが、死亡する率が7~10%、後遺症の発症率が30~40%と、ヒブの倍くらい多いです。

4. ワクチンの効果と副作用(副反応)は？

- ・子どもは小児用肺炎球菌(不活化ワクチン)がたいへん有効です(大人の肺炎球菌ワクチンとは別のものです)。約90種類ある肺炎球菌のうち、重症になりやすい15種類または20種類を選んでつくられたワクチンです。世界中で効果と安全性が確かめられています。

- ・WHO(世界保健機関)は、小児用肺炎球菌ワクチンを最重要ワクチンの一つに位置付けています。
- ・接種したところが赤くなったり、接種した日の夜に熱がでることもあります。

5. 予防接種の受け方と時期は？

- ・接種対象は、2か月以上5歳未満です。生後2か月になったらできるだけ早く接種しましょう。
- ・できるだけ6か月までに初回免疫の3回の接種を終えるようにしましょう。
- ・27日以上の間隔で3回、12か月～15か月(3回目接種から60日以上あけて)に4回目(追加)を接種します。

6. 予防接種による健康被害救済制度について

定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障がでるような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、予防接種法に基づく補償を受けることができます。健康被害の程度等に応じて、医療費、医療手当、障害児養育年金、障害年金、死亡一時金、葬祭料の区分があり、法律で定められた金額が支給されます。死亡一時金、葬祭料以外については、治療が終了する又は障害が治癒する期間まで支給されます。

ただし、その健康被害が予防接種によって引き起こされたものか、別の要因(予防接種をする前あるいは後に紛れ込んだ感染症あるいは別の原因等)によるものなのかの因果関係を、予防接種・感染症医療・法律等、各分野の専門家からなる国の審査会にて審議し、予防接種によるものと認定された場合に補償を受けることができます。

※ 給付申請の必要が生じた場合には、子育て支援課へご相談ください。

7. その他

※ 接種後30分間は特に体調の変化がおりやすいのでご注意ください、接種機関もしくは医師と連絡ができるようにしてください。

1歳までの小さい子どもが、ターゲットになりやすい病気です。



肺炎球菌による肺炎や、中耳炎、細菌性髄膜炎から子どもたちを守りましょう。